

# erudio 5

くずまき高原



## 目次

センター長より	2
センター改組・総合化	3
委員会および部門会議名簿	4
兼務教員の抱負	7
事務系責任者の抱負	15
部門長の抱負	16
専任教員の抱負	17
入試部門	18
全学共通教育企画・実施部門	19
教育評価・改善部門	20
専門教育関係連絡調整部門	21
学生生活支援部門	22
就職支援部門	23
プロジェクト(現代GP)	24
プロジェクト(放送大学)	25
プロジェクト(アイアシスタント)	26
岩手大学全学共通教育の概要	27



上外川高原風力発電所

# センター長より

## 「進化する大学教育総合センター」

玉 真之介

### 総合化の眼目

平成18年度から大学教育センターが大学教育総合センターにバージョンアップしました。次ページの組織図にあるように、全学共通教育とFD、そして専門教育連絡調整を担当する3部門に加えて、入試部門、学生生活支援部門、就職支援部門が加わり、事務組織は学務部の4つの課すべてがセンターの支援組織として位置づけられました。

総合化の眼目(その1)は、企画・立案力の強化にあります。入試に関わる専門委員会や全学学生委員会、全学就職委員会は、各学部代表者による実施面での調整という機能に重心がありました。新たな部門は、この機能に加えて兼務教員が全学的観点に立つて企画・立案するところにもう一つの重心があります。

そのために、会議も定例化して、懸案事項を整理し、順次対応策を検討していくことになります。

眼目(その2)は、部門間の連携です。これまで各委員会は十分な連携がありませんでした。部門となったことによって、入試と就職や課外活動と教育の連携、キャリア教育の充実、入学前教育など様々な連携の取組が可能となってきます。

### 入試部門による入試戦略の立案

入試部門には新たに専任教員が着任しました。入試部門の課題は、平成20年度入試以降の入試戦略の立案です。これまでも入試戦略がなかったわけではありませんが、学科や学部単位のもので、全学的観点に立ったものではありませんでした。また、次年度を中心とした短期のものでした。

4年後に12万人の受験生が減少すると予測されている事態を考えると、学科や学部単位の戦略では限界があります。どうしても、全学的観点に立った中長期の入試戦略が必要です。また、数値目標に基づく戦略的投資を含む計画的な対策が取られる必要があります。

その際には、教育の個性化、教育力の向上も合わせて検討されねばなりません。そこに部門間の連携という課題が出てきます。

岩手大学が全国区で学生を集められる大学となるためには、地域に愛され世界に通用する魅力ある教育の個性化が不可欠です。宮沢賢治とESDの一体化によってその可能性が広がるのではないかと考えています。

### 開設記念講演会の開催

大学教育総合センターの開設を記念して、4月10日中に中教審の委員でもある大学評価・学位授与機構の荻上紘一教授に「中教審答申と地方大学の未来」と題して講演をしていただきました。

講演では、地方大学が生き残っていくには、「個性」や「特色」で勝負して、オンリーワンを目指すしかなく、そのためにも教員個人の取組が中心であった大学教育を教養教育・専門教育ともに見直して、「組織としての教育力」を高めていく必要があることが強調されました。

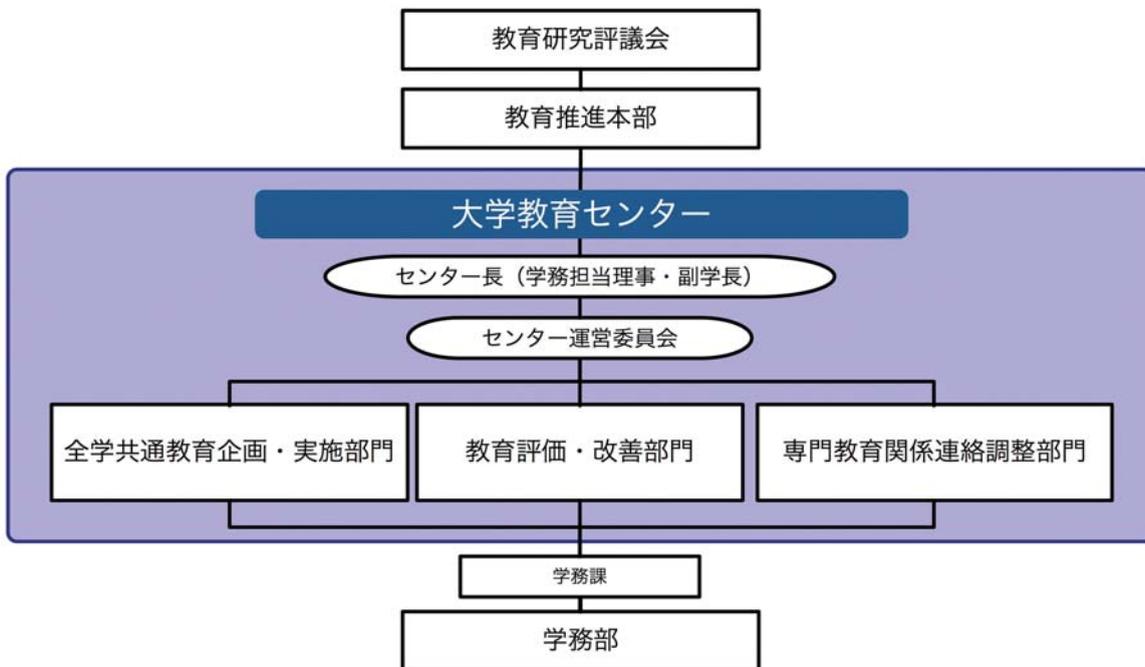
また、大学設置基準の改正により学科目制、講座制に関する諸規定が削除されたこと、大学院設置基準も大幅に改正されたことを大学としてしっかりと受け止めて、適切な対応を行っていくことが今後の大学評価や認証において重要となることも強調されました。

### 全学共通教育「改革実施案」

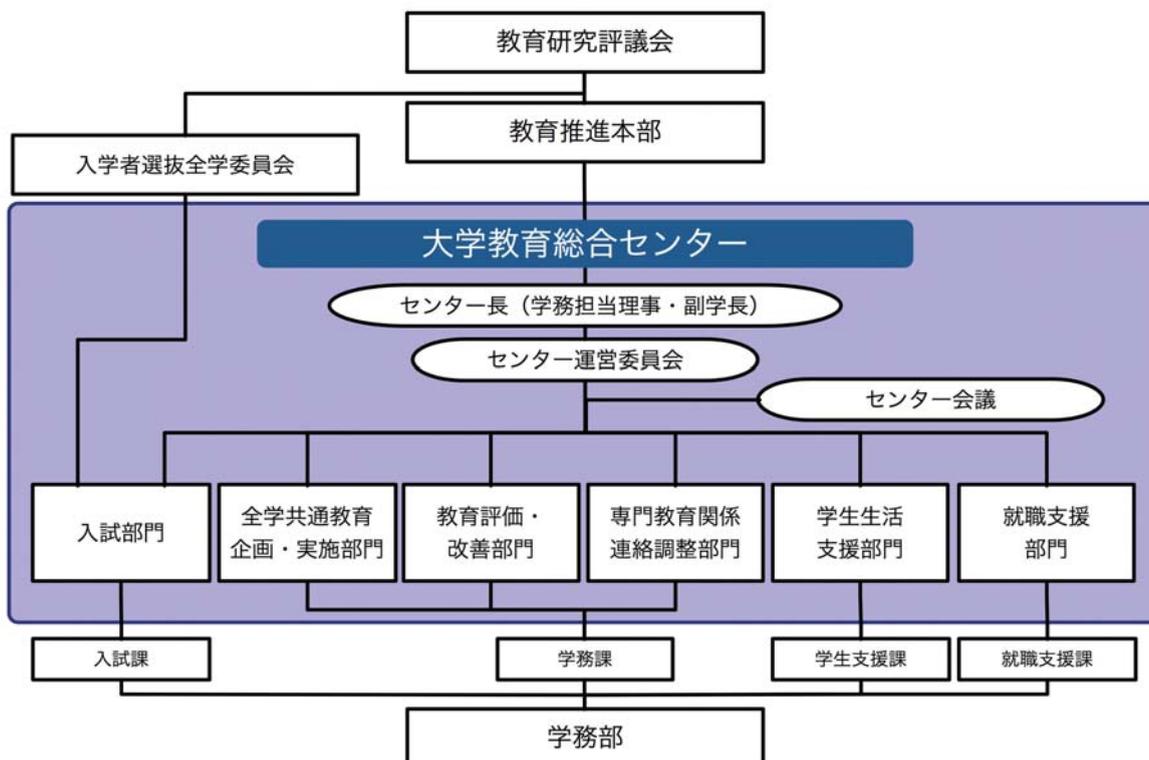
運営委員会において1年間かけて審議してきた全学共通教育の「改革実施案」がついに全学合意されました。分科会への登録も始まりました。法人化第1期の暫定評価(実質的な本評価)は、平成20年度です。学内合意と実施準備を進めて、平成19年度に全学共通教育の改革を実施し、その成果と実績を出して暫定評価に入ることがぜひとも必要です。ご理解とご協力をお願いします。

# センター改組・総合化

大学教育センター 組織図 (平成16年4月設置)



大学教育総合センター 組織図 (平成18年4月改組)



# 委員会および部門会議名簿

## 大学教育総合センター 運営委員会

(平成18年4月1日現在)

	氏 名	所 属
センター長	玉 真 之 介	理事 (学務担当)
副センター長	岡 田 仁	人文社会科学部
入試、専門教育連絡調整、 学生生活支援、就職支援部門長	玉 真 之 介	理事 (学務担当)
全学共通教育企画・実施部門長	岡 田 仁	人文社会科学部
教育評価・改善部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
副学部長	井 上 博 夫	人文社会科学部
	村 上 祐	教育学部
	長谷川 正 之	工学部
	高 畑 義 人	農学部
学部選出委員 (教務関係委員長)	吉 村 泰 樹	人文社会科学部
	押 切 源 一	教育学部
	成 田 榮 一	工学部
	谷 口 和 之	農学部
学務部長	畑 中 文 穂	学務部

## 大学教育総合センター センター会議

(平成18年4月1日現在)

	氏 名	所 属
センター長	玉 真 之 介	理事 (学務担当)
副センター長	岡 田 仁	人文社会科学部
入試、専門教育連絡調整、 学生生活支援、就職支援部門長	玉 真 之 介	理事 (学務担当)
全学共通教育企画・実施部門長	岡 田 仁	人文社会科学部
教育評価・改善部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
センター専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
	江 本 理 恵	大学教育総合センター
	福 永 良 浩	大学教育総合センター
学務部長	畑 中 文 穂	学務部

## 入試部門会議

(平成18年4月1日現在)

	氏 名	所 属
部門長	玉 真 之 介	大学教育総合センター長
専任教員	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出)	尾 臺 喜 孝	人文社会科学部
	辻 野 哲 司	教育学部
	山 口 明	工学部
	山 岸 則 夫	農学部
	白 倉 孝 行	人文社会科学部
学部入試委員会 正・副委員長	海老澤 君 夫	人文社会科学部
	栗 林 徹	教育学部
	遠 藤 匡 俊	教育学部
	大 塚 尚 寛	工学部
	菅 野 良 弘	工学部
	小 野 伴 忠	農学部
	倉 島 栄 一	農学部
	土 井 正 人	学務部
入試課長	土 井 正 人	学務部

# 委員会および部門会議名簿

## 全学共通教育企画・実施部門会議

(平成18年5月1日現在)

	氏名	所属
部門長	岡田 仁	人文社会科学部
専任教員	山崎 憲治	大学教育総合センター
兼務教員 (分科会代表)	小林 睦	人間と文化分科会
	横山 英信	人間と社会分科会
	西崎 滋	人間と自然分科会
	山口 春樹	総合科目分科会
	出口 善隆	環境教育科目分科会
	齋藤 博次	外国語科目分科会
	黒川 國児	健康・スポーツ科目分科会
	佐藤 拓己	情報科目分科会
学部教務関係委員会選出委員	藤原 千沙	人文社会科学部
	菅野 文夫	教育学部
	藤代 博之	工学部
	井良澤 道也	農学部
学務課長	古井 修子	学務部

## 教育評価・改善部門会議

(平成18年5月1日現在)

	氏名	所属
部門長	後藤 尚人	人文社会科学部
全学共通教育企画・実施部門長	岡田 仁	人文社会科学部
専任教員	江本 理恵	大学教育総合センター
	福永 良浩	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出)	砂山 稔	人文社会科学部
	小林 睦	人文社会科学部
	名古屋 恒彦	教育学部
	上濱 龍也	教育学部
	小川 智	工学部
	恒川 佳隆	工学部
	築城 幹典	農学部
	高橋 壽太郎	農学部
学務課長	古井 修子	学務部

## 専門教育関係連絡調整部門会議

(平成18年5月1日現在)

	氏名	所属
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター長
専任教員	山崎 憲治	大学教育総合センター
兼務教員 (学部教務関係委員会選出)	山内 茂雄	人文社会科学部
	菅野 文夫	教育学部
	成田 榮一	工学部
	河合 成直	農学部
学務課長	古井 修子	学務部

# 委員会および部門会議名簿

## 学生生活支援部門会議

(平成18年4月1日現在)

	氏 名	所 属
部門長	玉 真 之 介	大学教育総合センター長
兼務教員 (学部学生委員会選出)	菊 池 孝 美	人文社会科学部
	武 田 京 子	教育学部
	一ノ瀬 充 行	工学部
	東 淳 樹	農学部
学部選出委員	河 田 裕 樹	人文社会科学部
	菊 地 悟	教育学部
	堺 茂 樹	工学部
	黒 田 榮 喜	農学部
学生支援課長	菊 地 壮	学務部

## 就職支援部門会議

(平成18年4月1日現在)

	氏 名	所 属
部門長	玉 真 之 介	大学教育総合センター長
兼務教員 (学部就職委員会選出)	堀 毛 一 也	人文社会科学部
	大 河 原 清	教育学部
	西 谷 泰 昭	工学部
	木 村 伸 男	農学部
就職支援課長	後 藤 周 悦	学務部



# 兼務教員の抱負

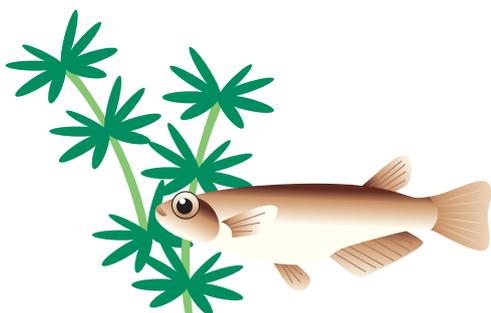
## 【入試部門】



おだい よしたか  
**尾臺 喜孝**

(人文社会科学部 助教授)

具体的な抱負はこれから考えていきたいと思っています。



やまぐち あきら  
**山口 明**

(工学部 助教授)

前年度大幅な志願者減となった学部からの、入試部門の兼務教員となりました。学部の入試委員になってから日も浅く、このような重責を担うにはまだまだ経験も知識も不足していますが、これから勉強しながら務めさせて頂ければと思います。言うまでもなく、工学部では志願者数の反転増加が喫緊の課題となっていますが、これは全学的にも重要な問題の一つであるのは間違いありません。そして他にも大学全体で解決すべきことが今後いろいろ出てくるのだらうと思います。もちろん役目としてこれらに積極的に取り組む所存ですが、もしその成果として意欲と能力に満ちた生徒がより多く岩手大学に入学するようになるなら、それは至上の喜びです。



つじの てつじ  
**辻野 哲司**

(教育学部 教授)

抱負は特にありませんが、審査資料にミスが無いよう心掛けています。



やまぎし のりお  
**山岸 則夫**

(農学部 助教授)

岩手大学にとって重要な節目の時期に、このような大切な役目をお預かりすることに緊張と責任の大きさを感じています。まず、早急に入試に関する事柄を理解し、少しでもお役に立てるよう努力したいと思います。

# 兼務教員の抱負

## 【全学共通教育企画・実施部門】



こばやし むつみ  
**小林 睦**

(人文社会科学部 助教授)

今年度で2期3年目の全学共通教育企画・実施部門兼務教員となります。1期目から引き続き懸案であった、全学共通教育の全教員担当体制および分科会の再編の目処が立ち、いよいよ平成19年度からの実施に向けて動き出そうとしています。これら新たな試みについての学内合意を得るために、専任教員の方々が注がれたエネルギーは多大なものです。兼務教員として、そうした議論に参加して強く感じたのは、相手の意見に耳を傾ける謙虚さ、誤解を解きほぐすためのねばり強さ、全学共通教育にかんする堅固な信念、等々の重要さです。



よこやま ひでのぶ  
**横山 英信**

(人文社会科学部 教授)

自分なりのものの見方・考え方をいかに作り上げていくか。人間にとってこの問題は一生をかけて追求すべきほどの大きな問題です。私自身の経験(そんな大層なものではありませんが)を振り返ってみると、その基礎的部分は明らかに大学時代に形成されたものと思います。そして、そこには大学で受けた教養科目の講義で「目からうろこが落ちた」経験をしたことが含まれています。幅広い視野と総合的な判断力を身につけるという教養科目の意義は、大学卒業後何年か何十年か経ってはじめてその意義が理解できるものなのかも知れませんが(お恥ずかしながら、私も学生時代にはほとんど理解していませんでした)、学生の皆さんが興味を持ち、そこから何かを得てくれるような講義を提供できるよう、微力ながら頑張りたいと思っています。



にしぎき しげる  
**西崎 滋**

(人文社会科学部 教授)

今年4月より、全学共通教育分科会「人間と自然」の代表として兼務教員を引き受けることになりました。全学共通教育は、専門教育とともに大学教育という車の両輪をなしており、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ために重要な位置にあります。科学・技術が高度に発達した社会における教養ということを考えるとき、理系科目の充実の必要性を強く感じていますが、数学や理科嫌い・離れが問題にされている一方で、積み重ねて段階的に履修することが必要な理系科目の企画・実施の困難さをも実感しているところです。今後、兼務教員として全学共通教育の改善・充実に力添えできればと考えています。



やまぐち はるき  
**山口 春樹**

(人文社会科学部 教授)

総合科目分科会は今年度で廃止されるのがほぼ確実となっています。わたしは最後の総合科目委員長となるわけで、その点ではある感慨を覚えます。とはいえ、総合科目そのものがなくなるわけではありません。従来、総合科目は授業を担当する教官が委員になるとは限らず、委員と担当教員の意思疎通がうまく行っているとはいえませんでした。来年度からはそのような矛盾を解消し、担当教官同士で授業の運用を行っていくことになる予定です。年々校務が増大していく半面、給与は下がっていく中、自分の担当している専門科目以外に授業を持たされるのは大変なこととは思いますが、新分科会へ移行するに際し、各学部の教官たちが総合科目というものにもっと関心を寄せて頂き、教養を高める上で重要な総合科目の役割を認識して頂ければと願っています。

# 兼務教員の抱負

## 【全学共通教育企画・実施部門】



でぐち よしたか  
**出口 善隆**  
(農学部 講師)

今年4月より、全学共通教育分科会「環境教育科目」の代表として兼務教員を引き受けることになりました。人間を取り巻く「環境」が大きく変化しています。そんな現代においては、「人類的諸課題に対する基礎的な理解力」を備えた人材の育成がより重要となっています。本学における環境教育の出発点として、学生の皆さんが人間を取り巻く「環境」に興味を持ち、自ら「人類的諸課題」について考える講義を提供できるよう、微力ながら頑張りたいと思っております。よろしくお願いいたします。



くろかわ くにじ  
**黒川 國児**  
(教育学部 教授)

平成19年度から全学共通教育の実施体制が大きく変わろうとしている。非常勤講師手当の削減の厳しい中で、限られた人的資源・物的資源を有効に活かし、目標達成に向けて鋭意努力していくこととはいえ、学生の健康・体力面に関する基礎的知識の習得、生涯スポーツ社会の実現に資する基本的技能の習得、自主的主体的に取り組む実践的態度の育成等は、これまでの多くの学生の実態から観て必要課題としたい。自らの健全なライフスタイル構築に向けて、自主的主体的実践活動が定着し日常化することこそ「人間力」を高める身体的財産の獲得と思えてならないから。



さいとう ひろつぐ  
**齋藤 博次**  
(人文社会科学部 教授)

19年度から始まる全学共通教育の改革がよいよ佳境に入り、外国語に関しても具体的なカリキュラムの作成で毎週のように会議が開かれている。19年度から学生は、原則として、(1)英語8単位、初修外国語0単位、(2)英語4単位、初修外国語4単位、(3)英語0単位、初修外国語8単位という3つの選択肢から履修形態を選ぶことになっている。学部からの特別の要求がない限り学生は自分の興味に合わせて外国語の履修ができるというメリットがあるのだが、このことは、各言語ごとのクラス数をどのくらい用意すればいいのか予測するのが難しいことを意味している。過去のアンケートなどを参考にしながらシュミレーションを作っているのだが、これが実に悩ましい。無事にテイク・オフできるよう微力を尽くしたい。



さとう たくみ  
**佐藤 拓己**  
(工学部 助教授)

今年から工学部教務委員になり、あわせて情報基礎の責任者をおおせつかり、全学共通教育企画・実施部門の兼務教員として働くことになりました。この分野の仕事は何分にも初めてで全てがわからないことばかりですが、一生懸命に努めさせていただき所存でございますのでよろしくおねがいたします。19年度からカリキュラムの大幅な改正があり、岩手大学の共通教育のシステムも大きな変革が求められていると思います。この変革が、よりよい方向に向かいますよう、微力ながら、できることはすべてやるつもりでがんばります。

# 兼務教員の抱負

## 【教育評価・改善部門】



すなやま みのる  
**砂山 稔**

(人文社会科学部 教授)

大学の教員評価が実施に移され、①研究②教育③社会貢献④大学運営の四つの側面で評価がなされる。このうち、研究面の評価が第一に置かれるのは当然で、筆者は大学の教員評価はこの側面だけでもよいのではないかと考えている。これが徹底されれば、岩手大学の質的向上に資するところがあるのは自明のことであろう。

兼務教員は二年目であるが、大学教育総合センターにおける教育の改善も研究活動の進展を妨げないよう配慮して行われるのが望ましいのではないだろうか。こうした観点からの発言を繰り返して行きたい。



かみはま たつや  
**上濱 龍也**

(教育学部 助教授)

評価・改善部門の兼務教員になり、早くも3年目となりました。大学全入時代も目前となり、大学に対するイメージやニーズ、さらに、入学してくる学生も変化してきています。このような中、私たち教員にも変化が求められていると思います。アイアシスタントの稼働など授業改善などへの具体的取組の開始に伴い、「学生にとって有益」な大学であるために「どのような取組がベターなのか」ということを忘れず、授業のすすめかた、その評価、様々な場面での学生支援などについて、取り組んでまいりたいと思います。



こばやし むつみ  
**小林 睦**

(人文社会科学部 助教授)

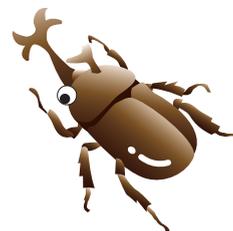
今年度で2度目1年ぶりの教育評価・改善部門兼務教員となります。法人化以降、業務内容が増えることはあっても減ることのない現状において、今後のFD活動における課題となるのは、時間資源の配分という問題であると思われます。改善の努力に関するアウトカムの評価は必須だとしても、それが授業コンテンツそのものの充実に費やすべき時間を奪うようでは本末転倒です。教育の評価は、あくまでインセンティブとして機能すべきであって、授業改善という本来の目的に奉仕すべきことを、忘れてはならないと考えています。



なごや つねひこ  
**名古屋 恒彦**

(教育学部 助教授)

今年度より、教育評価・改善部門兼務教員となりました教育学部(障害児教育講座)の名古屋恒彦と申します。教員として学生の成績を評価する度に、自らの授業力の不足を反省することしきりでした。とはいえ、その反省を反映することもできないまま、学生の成績評価だけが活字になっていくことに申し訳なさを感じておりました。そのような中で、教育に対する学生による評価が、本学で大きく位置づけられるようになり、心の責めも軽減いたしました。しかし、なおいっそう、学生の思いを映し出す評価システムが構築されるよう励まねば！ と肝に銘じております。



# 兼務教員の抱負

## 【教育評価・改善部門】



おがわ さとし  
**小川 智**

(工学部 助教授)

今年度より兼務教員を務めます工学部応用化学科の小川智です。大学における授業改善の必要性を痛感し、工学部では、数年前から専門科目の授業実施報告を実施し、また一昨年から学生による授業評価も実施しています。これらの結果は、平成17年度分より専門科目担当教員全員に配布し、授業改善の重要性を喚起しています。大学における教育の重要性は、言うまでもなく大学運営の根幹であり、構成教員すべてが強く認識すべきことと考えています。これまでの経験を生かし、教育評価・改善部門兼務教員として、全学的な視野に立った教育の改善に努めていきたいと思いません。



つねかわ よしたか  
**恒川 佳隆**

(工学部 助教授)

この4月より兼務教員を務めます恒川です。全学的にFDの取り組みとして、学生による授業アンケートが実施されるようになってきました。この授業アンケートを本当に実りあるものにしていくためには、教員個人個人がPlan-Do-Check-Action(PDCA)の中で授業評価の結果を積極的に活用し、有意義に螺旋状サイクルを循環させていくことが重要だと考えています。また、学力や履修履歴の異なる多様な学生に対応していくためには、今後授業デザイン力が何よりも求められているように感じます。本部門の兼務教員として全学的な視野に立って種々の問題に取り組んでいきたいと思いませんので、よろしくお願ひいたします。



ついき みきのり  
**築城 幹典**

(農学部 助教授)

この4月より、教育評価・改善部門の一員となりました。独立行政法人化に伴いより質の高い教育が求められていますが、その評価・改善は教員側でも学生側でもなかなか難しいものです。現在試行されているアイアシスタントなどにより、教員側の負担増にならずに学生との間のコミュニケーションがはかれれば、こうした問題も解決されていくのではと思っています。また、限られた教員数で効果的な教育を行うためには、学部の枠をこえた教育体制もますます重要になってくると思われます。本部門の兼務教員として、これらの問題に取り組んでいければと考えていますので、よろしくお願ひいたします。



たかはし じゅたろう  
**高橋 壽太郎**

(農学部 教授)

これまで2年間大学教育センターの教育評価 改善部門の兼務教員をしておりましたが、引き続き大学教育総合センターの兼務教員となりました。日頃学部教育での講義を担当しておりますが、私の場合は先輩の先生方の講義をお手本にして授業を進めてきましたが、講義の仕方には教員個人個人でかなりの違いがあることに気がつきました。それはそれで教員個人個人の特徴や工夫が込められていて、大学の講義らしいものと感じています。しかし、受講する学生側から見ると、講義内容とシラバスが大きく異なっていたり、評価方法が教員によって大きく異なる事は好ましい事ではないと思ひます。教育評価基準のガイドラインが必要となっております。また、教育機材の発達によって、講義形態の多様化が起こっておりますが、受講する学生の立場になって、学習効果の上がるように工夫する必要があります。授業は教員と学生がいて、かつ学ぶ場があって成り立っていますので、一方では学生が自ら予習復習するような仕組みを考えなければなりません。このことはFD(教育評価 改善のための教職員研修)の場等でも議論していきたいと思ひます。

# 兼務教員の抱負

## 【専門教育関係連絡調整部門】



やまうち しげお  
**山内 茂雄**

(人文社会科学部 助教授)

今年度より、大学教育総合センター専門教育関係連絡調整部門を兼務することになりました。現在、大学における教育に対して、教養教育と各学部、大学院研究科で行われる専門教育とが連携して行われることが求められています。私は、人文社会科学部の専門教育科目の他、全学共通教育科目、農工学部専門基礎科目を担当していて、様々な学部の学生に対して授業を行っています。私の担当する授業とそれぞれの学部の教育とのつながりについて、強く意識してはいませんでした。これを機会に、授業科目の位置づけやつながりをあらためて意識し、学生にとってより良い教育が実施されるよう、少しでも貢献できればと思っています。よろしくお願いします。



かんの ふみお  
**菅野 文夫**

(教育学部 教授)

うっかりしているうちに、教育学部で歴史を担当して20年になりました。この間、大学の雰囲気はずいぶん変わりました。学生諸君も、それをとりまく社会も、大きく変化したと言われていますね。それはたしかで、そもそも変化しない世の中などありません。問題は変化の内実であり、通俗的に流布しているキーワードでそれを捉えるのではなく、研究者の作法で、データに基づいてきちんと理解した上で対応を考えることが重要でしょう。また戦後の大学人が築いてきた達成は大きく、これを大切にしたいとも考えております。



なりた えいいち  
**成田 栄一**

(工学部 教授)

これまで工学部の教務委員を二三次担当しましたが、正直いってあまり身を入れて務めてきたわけではありませんでした(反省)。そんな私が工学部の教務委員長になり、全学的な立場からも教務関係に携わることになりました。しかも、岩手大学が法人化3年目を迎え、教育内容を大きく変革しようという難しい時期。「人生、一寸先は闇」という言葉が頭に浮んだ次第です。しかし、いつまでも戸惑ってはいられません。少子化と教職員の大幅定員削減といった直接的な問題が顕在化しているなか、4学部の一層の連携が重要となっています。専門教育関係の連絡調整という役割を通じて、教育内容の向上に少しでも貢献できればと念じているところです。



かわい しげなお  
**河合 成直**

(農学部 教授)

農学部の河合成直と申します。研究指導を通して教育を行うことを念頭に勤務してきました。研究指導とは研究者にするための教育を行うことではありません。「優れた研究者は優れた教育者でもある。」これは、宮沢賢治の先生、関豊太郎を評した言葉です。真摯な研究活動は、自らの未熟さを認識させ、社会人としての規範や謙虚さなどを会得させると考えられ、それが最良の教育であると思われま。大学の社会に対する最重要課題は、良識ある学生達を多く送り出すことであり、研究成果はその副産物であると考えられます。社会の各方面で得られる研究成果を活用できる良識ある人材の育成能力が大学に求められていると思います。

# 兼務教員の抱負

## 【学生生活支援部門】



きくち たかよし  
菊池 孝美

(人文社会科学部 教授)

政府の5月の月例経済報告が「景気は、回復している」と述べたのを受けて、各新聞は2002年2月に始まった現在の景気拡大局面が52カ月となり、「バブル景気」を抜き、「いざなぎ景気」に次いで戦後2番目になることが確実になつたと報じています。しかし、果たして学生の生活は良くなっているのでしょうか。学生生活支援部門の審議事項である授業料免除の申請数などを見ると、ここ数年間に増えており、学生の生活が全体として良くなっているとは思えないような状況です。こうした中で、生活支援はますます重要な仕事になっているといえます。もちろん経済的な面だけが生活支援のすべてではなく、支援部門が扱う仕事は課外活動、施設管理など広範囲にわたっていますが、このような学生の実態も踏まえて学生支援を進めることが重要であると考えています。



たけだ きょうこ  
武田 京子

(教育学部 教授)

今まで、講義・担任・卒業研究以外に学生と触れ合う機会は無く、身近な存在でありながら、生活実態を知ることはありませんでした。「学生生活支援部門」とは、基本的な支援である奨学金・授業料免除から課外活動までの充実を図ることを知りました。人間が生きていくには、経済欲求・身体欲求(健康)・関係欲求(情緒的なつながり)・価値欲求(生きがい)の4つが挙げられます。充実した学生生活を送れるよう、微力ながらお役に立ちたいと考えています。



あずま あつき  
東 淳樹

(農学部 講師)

卒業間近の学生に聞いてみました。「学生生活はあっという間でした。」自分のことを思い返してもやはり同じです。今、学生さんを見ていると、入学当初の目の輝きはどんどん薄れ、覇気がなくなっていく。それぞれの学部に入學したけれど専門の勉強は少なく、ただ単位をそろえるだけの毎日。もっと自分の興味のあることがやりたい。そんな人は、研究室やゼミのドアを叩き、1年生のうちから先生や先輩の実験や調査の手伝い、ゼミに参加させてもらってください。待っていても面白いことは始まりません。それが大学です。まさか配属前に研究室やゼミに出入りできないなんて思っていないませんか？それは頭の固いひとの発想です。興味のあることには貪欲に。それが学生生活を楽しく過ごす秘訣です。



いちのせ みつゆき  
一ノ瀬 充行

(工学部 教授)

本部門は、生活支援に関わる部門ですので、卒業してからも「岩手大学に在学していたことが良かった、誇りです」と回顧してもらえるよう生活支援活動を行いたいと考えております。工学部の学生に関しては、多少なりとも理解していますが、他学部の学生となるとそれぞれの気質を理解していないことがありそうな気がします。各学部の先生と協力して運営に当たっていきますので、全学の学生がよりよい学生生活を送れるように支援していきたいと考えております。それにしても学生からの問題提起があれば、支援もしやすくなりますので、学生諸君自身も「良い岩手大学にしたい」という向上心を持って、意見等を寄せてくれることを期待しています。

# 兼務教員の抱負

## 【就職支援部門】



ほりけ かずや  
**堀毛 一也**

(人文社会科学部 教授)

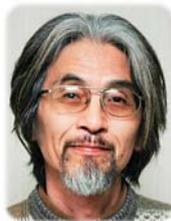
人社の平成17年度の就職率(3月末現在)は89.2%で、平成16年度に比べ、若干ですが改善がみられました。本年もこの数値をさらに上昇させることが第一の目標になると思います。人社では、理系と異なり、教員のところに就職の話が持ち込まれることはほとんど皆無です。その分、学生ひとりひとりの就職活動を支援することが重要になります。そこで、全学の体制と協調させながら、学部独自の支援活動をどう展開してゆくか、その検討を本年の課題として位置づけております。試みの一端として、すでに工学部で実施されているインターンシップ制の導入や単位化について、学部独自の制度や実施体制を本年度中に整えるべく準備を進めております。各位のご指導ご協力を賜れば幸いに存じます。



おおかわら きよし  
**大河原 清**

(教育学部 教授)

教員採用試験では、採用時点からベテラン教員と同じように仕事のできることが期待されており、「あなたが教員になったなら、児童・生徒に何ができるか」を真っ先に問われることとなります。私たち教員はこうした事態を直視して、実践に役立つ根源となる知識と技能とを理論的な体系として教授することを心掛けています。学生一人一人が希望する職種に就職できることを第一に、結果として就職率の高くなることも願っています。私たち教育学部教員は一致団結して教員採用のためのセミナー講師して参加する他、日頃の授業においても学生を大切にしたい指導に専念しております。みなさまがたのあたにかいご支援とご協力とを今後お願いする次第です。



にしたに やすあき  
**西谷 泰昭**

(工学部 教授)

就職支援部門の兼務教員となりました工学部就職委員会の西谷です。よろしくお願いたします。工学部では、個々の学生の就職活動に対する支援は従来からきめ細くなされておられ、十分な実績もあると自負しています。センターの支援事業に期待するのは、低学年からのキャリア開発教育です。センターではこのためのプログラムが数多く企画実施されていますが、工学部の学生・教職員は、プログラムの存在自体を知らない・企画の目的/効果がわからないなど、センターの就職支援事業を少し遠いものを感じています。広報活動を工夫することが重要だと考えています。



きむら のぶお  
**木村 伸男**

(農学部 教授)

就職状況は、今年度に入っていくぶんよくなった。しかし、北東北地方についてみると、依然、厳しい状況にある。特に、学生の希望を満たす就職先となると難しい。他方、求人側もよい学生を求めて、研究室を訪問される。話を聞いてみると、基礎的な専門知識があり、会話力、課題解決能力に優れ、しかも行動力のある者を求める。学生の考えと求人側ではギャップは大きい。こうした現況では、学生の早い時期から就職に対する計画的な教育が必要であり、個々の学生に合わせた適切な指導を行わねばならない。そうしたことを行っていきたい。



# 事務系責任者の抱負



はたなか あやお  
**畑中 文穂**

(学務部 部長)

学生が大学生活を有意義に感じ、社会に出ても岩手大学生として自負できるような人材となることを願って、サポートに努めたいと思う。そのための大学教育総合センターの役割は重要と考える。教員に対してはきびしく、学生に対しては優しくをモットーに……



どい まさひと  
**土井 正人**

(入試課 課長)  
入試部門

入試部門は、入試について、その在り方についての調査研究を行うと共に、その実施運営や広報活動を行っています。これからは、今まで以上に他の部門と連携・協力し、入試の視点から魅力ある大学作りに関わっていきたく考えています。



ふるい しゅうこ  
**古井 修子**

(学務課 課長)  
全学共通教育企画・実施部門/  
教育評価・改善部門/  
専門教育関係連絡調整部門

岩手大学の学生、職員は、自分たちが思っている以上に人間的価値の高い人材で構成されています！自信を持ちましょう。卒業生に「岩手大学で学んで良かった」と感じてもらえることを目標に、学生センター職員も側面から、ときには正面から、手と口を出していきたいです。



ごと しゅうえつ  
**後藤 周悦**

(就職支援課 課長)  
就職支援部門

低学年からの「キャリア教育」の推進を図る上での課題は「人集め」。どんなに素晴らしい「講座」を企画しても受講者が少なければ成果もそれなり。参加学生は、「大変参考になった。今、何をなすべきか、これを契機に活動開始する。etc」と好意的な「気づき」を表明している。そしてこの様な学生は就職活動も積極的に推進し苦労しながらも内定に繋がっている。今、就職活動は突然「クラッチ」を切り替えたように3年次から始めているが、低学年から「キャリア」を「生き方」として認識し、入学から卒業までの大学生活を通して継続的に人間性を高める努力を重ね、その蓄積が「魅力ある人材」となるということを多くの学生に気づいてもらいたい。



きくち つよし  
**菊地 壮**

(学生支援課 課長)  
学生生活支援部門

私達は、学生生活支援全般を担当しています。岩手大学として、特に他大学等に誇れるものとして、次の事項が挙げられます。「学長と学生との懇談会」の年2回定期開催、月1回学生が学務担当理事を囲んでランチをとる「ガンチョンタイム」、全国唯一の「図書館サポーターズ」、学生による学生相談「ピアサポーター」、学生団体によるプロジェクトへの資金援助「Let'sびぎんプロジェクト」、地域連携事業による地域連携協定締結自治体への学生派遣、「がんちゃん奨学資金貸与制度」です。今後は、上田地区学生寮の大型改修、課外活動施設・福利厚生施設の改修等及び現在より多数の学生にいきわたるような授業料免除の在り方について、検討したいと考えています。

# 部門長の抱負



たま しんのすけ

**玉 真之介**

(理事(学務担当)・副学長)

センター長

入試部門長／専門教育関係連絡調整  
部門長／学生生活支援部門長／就職

## 支援部門長

6月で1年が経過し、2年目に入りました。昨年は、例の強盗事件を教訓として如何に学生相談の体制を作るのか、という課題と、全学共通教育の改革がもつぱら頭にありました。入試は、仕組みを学んだ1年で、何もできませんでした。

いま、頭にあるのは、「将来像」と「大学院教育」の2つの中教審答申です。いずれも、昨年、出されたものですが、その重大性を理解したのは今年になってからでした。しかし、両者とも岩手大学が進めてきた方向が間違いないことを確認するものです。

ポイントは、教養教育の充実と大学院を含む単位制度の実質化です。そろそろ結果を出さないといけないと思っています。



おかだ ひとし

**岡田 仁**

(人文社会科学部 教授)

副センター長

全学共通教育企画・実施部門長

全学共通教育企画・実施部門では、来年度(平成19年度)に始まる全学共通教育の改革案の実施を目前にして大変緊張しています。この改革案は大学教育センター発足と同時に検討が始まり、運営委員会、部門会議、拡大スタッフ会議等が修正に修正を加え、3年経ってやっと実施の目途が付いたところです。

検討にかなりの時間を要したので各方面の意見を盛り込むことが出来ましたが、反面、原案にあった一貫した理念やシャープな訴求力は若干失せた感があります。しかし、当然のことですが、改革実施案は大学教育総合センターのために作られるものではなく、岩手大学の教育改革の一環として位置づけられるも

のですから、その策定に当たって多くの教職員が関与し、岩手大学の全学共通教育のあり方について議論できたことは、そのこと自体非常に有意義だったと思います。あとは、この企画を実施すればよいのですが、緊張を覚えるのはこの実施という言葉の重さです。

実施のためには解決すべき課題や必要な微調整が出てくるかもしれません。しかし、この実施案には教養教育に対する岩手大学の現在の総意が込められていますので、その実現のためには、せっかくのこの部門の名前に恥じないよう、最善を尽くすつもりです。また、全学共通教育の実施は全教員が関与するということが今回の改革の柱でもありますので、企画の時以上にご協力下さいますようお願いいたします。



ごとう なおと

**後藤 尚人**

(人文社会科学部 助教授)

教育評価・改善部門長

大学教育センターの立ち上げに関わり、最初の2年(全学共通教育企画・実施部門の専任的兼務教員)でお役御免とっておりましたが、この4月から大学教育総合センターになるということで、部門を横滑りして、引き続きご厄介になっております。

ここでの仕事は、先生方の授業を評価することではなく、より良い授業・教育を行なうためのお手伝いをすることだと考えています。とはいえ、自分がどれだけのモノかという、皆さんのお手本になるような授業・教育をしているわけではありませんので、お手伝いなのかお邪魔なのか判別しがたい部分が無きにしもあらずですが、教育の改善に向けて皆さんと一緒に考えていければと思っています。試行錯誤の日々が続きますが、どうぞよろしく願います。

# 専任教員の抱負



なかの たくや  
**永野 拓矢**

(大学教育総合センター 助教授)  
入試部門

13年間勤務した大学受験予備校から転身してまいりました。前職では主に大学入試の分析と高校への情報提供を行う立場でしたのでその接続を円滑に担う業務を行っておりました。その間、福岡、名古屋、北海道と転勤しましたが、各校で教える教科書はほぼ同じでありながら、進学体制は都道府県で大きく異なることに日本の教育の奥行きの高さに驚いていた次第です。

まだ着任後数ヶ月ですが、岩手大学の様々な課題について取り組んでいます。

今後本学の生き残り、もとい、発展策として県外からも広く入学者を募り全国に“岩大の存在”を広めていく必要があります。地域にあった募集戦略を施し、他大学から模倣されるような存在になっていきたい所存です。



やまさき けんじ  
**山崎 憲治**

(大学教育総合センター 教授)  
全学共通教育企画・実施部門/  
専門教育関係連絡調整部門

新分科会の成立が新しい共通教育を作る土壌を準備します。新分科会を設立させるとともに、次は岩手でなければ出来ない科目を掘り起こす作業が問われると思っております。単にローカルな課題という視点ではなく、グローバルな設定が問われています。ユニバーサル段階に入り、初年次教育が持つ課題はますます重要度を増しています。19年度からはじまる全員必須の少人数教育「転換教育」に焦点をあて、この内容と形態の深化を図りたいと考えております。



えもと りえ  
**江本 理恵**

(大学教育総合センター 講師)  
教育評価・改善部門

昨年4月に着任してから、あっという間に1年が立ちました。岩手大学の教職員のみなさまに暖かく受け入れていただき、のびのびと仕事させていただいております。

さて、今年度はなんとしてでも「成績評価基準のガイドライン」を作成しなければなりません。教員は学生に「到達目標」を提示し、学生は「到達目標」達成のために努力をする。そして、教員はその成果を厳格に評価する。ガイドライン作成を通して、すべての授業でこのような関係が成り立つよう、アイアシスタントの活用も含めて教育改善に取り組んでいきたいと思っております。

余談ですが、今年は「さんさ踊り」のパレードに参加しました。学生さんと一緒に練習していたのですが、自分が「教わる」側に立つことで、新たな視点を得るいい機会になりました。熱演賞4連覇もうれしいプレゼントです。



ふくなが よしひろ  
**福永 良浩**

(大学教育総合センター 講師)  
教育評価・改善部門

システムの立ち上げ時には、様々なトラブルや課題が発生しますが、これらの困難に立ち向かえるように心身ともに鍛えなければと思う毎日です。また、システムの運用に関しては、どんな良いシステムでも皆様に使っていただけるものとして提供する必要があります。そのため、ユーザビリティが高く、利用者の立場に立った思考で進めていきたいと考えております。現在、アイアシスタントの試行運用を行っており、来年度には、全教員の皆様に満足に利用していただけるように取り組んでいきたいと思っております。

# 入試部門

## 入試部門の概要

この部門は入学者選抜に係る調査、研究、企画、実施を行う部門です。多様化する受験生の能力、特徴を分析する一方で本学が求める学生像を明確に示すことで、学ぶ目的、意欲のある学生を受け入れられる体制を構築します。

### 岩大を取り巻く現代の入試事情

少子化の影響が深刻です。1992年には121万人を超えた大学短大志望者が、再来年の2008年度入試には定員と志望者の数が一致する全入時代を迎えます。

わずか16年で57万人近くも減ってしまいました。

受験生の気質も大きく様変わりし、「勉強しないとどこにも合格できない」から「どこかへは入れる」、さらには向上心の減衰(?)も響いて「(模擬試験の)判定がAのところを適当に探せばいいや」と“身の丈にあった満足感”で現状を肯定する輩も漸増傾向にあります。まさに由々しき事態です。

### 今後の岩手大学の有効な選抜方式とは

もともと、最近まではこういった“軟弱型”受験生は本学にとっては対象外だったのですが少子化の影響で下位層の裾野が広がる中、学部学科によっては入学者として迎えつつあるようです。

本学としては入学生の学力面での確保が永遠の必須項目であり、かつより志願者を増やして選抜方式を維持することが国立大学としての重要な任務のひとつであることだと認識しています。

その中で、既存選抜方式(推薦、一般前後期)の変更やAO入試の新設など、時流に従った受験生の能力をより引き出す選抜方法の仕組みを継続して構築していきたいと考えます。

### 学内教職員向け入試説明会実施

入試に関する認識を全学で共有するための企画として6月21日(水)に『入試戦略報告会』をG29講義室にて実施しました(約50名の教職員が参加)。前半部「今年度入試を振り返る」では“受験生の保護者の立場か

らみた”受験に対する説明。「受験のことは分かっている」つもりと自負されていた教職員から「1、2年でこんなにも変わるのか」と大変驚かれた意見をいただきました(終了後のアンケートから)。後半部は「岩手大学の入試戦略」として「生き残り策などの守備的な視点ではなく全国区を狙った強気な募集展開」について発表しました。受験生を増やすためにはそれなりの戦略が必要です。「推薦、個別前期、後期など選抜試験における他大学との差別化」や「広報の充実」など企画部門の強化を図る一方で、「高校への訪問および出張講義などの“売り込み”」「各社大学説明会への積極参加」さらには「個別試験の県外会場開設」など外部向け対策の必要性(営業面?の強化)を具体的に示しました。

終了後、多くの参加者から意見、質問が寄せられ、それぞれに回答しさらに内容を公開することで受験に関することや岩大の今後の方策など教職員に必要な共通認識が一層推進した印象を受けました。



学問といった見地で捉えれば“受験”という分野には対応マニュアルは存在しません。部分的な面も含めると大学入試に関する変動は毎年発生しているからです。特に今年は新教育課程を履修した世代が受験学年となりましたので旧来方式とは大きな変更が生じました。目ざましい時代の変遷にも迅速に対応した選抜方式の在り方について今後も方策を構築していきたいと考えています。

(文責:永野拓矢 tnagano@iwate-u.ac.jp)

# 全学共通教育企画・実施部門

## 全学共通教育企画・実施部門の概要

この部門は、全学共通教育(以下「共通教育」と表記)の授業編成(教育科目の確定、時間割の作成、非常勤講師の採用など)、高大連携、資格試験による単位認定等を行い、また共通教育の企画を進めております。ここでは、共通教育に関わって「新分科会」と「転換教育」に焦点をあてて説明いたします。

### 「新分科会」とは

平成18年6月30日をめどに新分科会の登録が進められております。平成19年度から共通教育を全教員体制で実施することが決定されており、新分科会の設立は、全教員が共通教育を担う一歩にあたります。すべての教員が、いずれかの分科会に属し、共通教育を創る主体になります。新分科会は共通教育科目を立ち上げる基礎となる組織です。新分科会は、授業改善のFD活動、共通教育の具体的課題の検討、授業科目の担当を定め、充実した共通教育を学生に付与する役割を持つこととなります。学生は、多様で豊かな共通教育を求めていることは確かです。

新分科会は、共通教育を進める実践的な組織です。本学の求める共通教育は、幅広く、深い教養と総合的な判断力の付与を課題としています。豊かな人間性を涵養することを共通の目標にしています。ここでは専門の豊かさを否定するものではありませんが、共通教育を専門の導入と等号関係におくことが、優れた共通教育の実践につながるとはいえないのではないかと考えております。学士課程をトータルにとらえ、課題探求能力を有する21世紀型市民の育成に結びつく共通教育の実践が社会に求められていることは、間違いありません。

分科会の中でオムニバス方式の授業を組む企画も生まれるでしょう。ほかの先生がどんな授業を展開されているか、ちょっとのぞきたくなる、そんな関係がこの分科会から生まれてくることを期待しております。新分科会は岩手大学の共通教育に新たな息吹を吹き込み、新しい芽を育てるものです。新分科会の設立、代表者の選出、代表者会議を経て、オムニバス科目の調整をすすめ、全体で10科目程度の新設科目が立ち上がっていくと思われま。10月には19年度の

共通教育の概要が定まっていきます。

### 「転換教育」とは

19年度から全学で1年生必須の共通教育科目として「転換教育(基礎ゼミナール)」が誕生します。大学のユニバーサル化(大学大衆化時代とも異なる全入状況)を迎え、学生に「学び方」や「社会性」を身につけさせることが、大きな学習課題になっています。19年度からは、新入生は「転換教育」のゼミから大学教育の第一歩を踏み出すと言っても過言ではありません。

ここでは専門や共通教育の導入ばかりか、自我と向き合ったり、社会性の自覚と探求を課題にしていきます。社会に目覚めると同時に、社会に積極的にコミットできる自分を育てる場を創ろうとしています。

一方、学力面でも、多くの課題を持つ学生が入学してきます。社会性を課題とされず、自己中心的な「お勉強」で過ごしてきた学生や、塾通いでたやすい回答方法を覚えることに終始してきた学生、あるいはほとんど机に向かうことなく、たまたま「受かってしまった」学生まで入学してきます。「まじめ」で「ひたむきに努力する」岩大学生気質が過去形で語られてはいけません。

少々「力」不足の学生が、半期の「転換教育」を経て、「努力への価値を認識できる」学生に成長すれば、大学教育の実践的展望は確実に開けてくるはずで。

現在、転換教育に関してワーキンググループが組織され、次の課題を論議しています。

#### A 知的活動への動機付けを高める

- 1 科学的思考方法と学習、実験、のデザイン能力の涵養
- 2 学問の自由にきちんと目を向けよう。
- 3 学生生活とその後のキャリアのデザインを充実させる。
- 4 アカデミックスキルとともに、ソーシャルスキルを涵養する。

#### B 形態

20名以下のゼミナール方式

- 1 学部内の選択制
- 2 高学年学生のサポートを受け入れ、学生が学びあう環境づくりをすすめる。

(文責:山崎憲治 yamaken@iwate-u.ac.jp)

# 教育評価・改善部門

## 教育評価・改善部門の概要

この部門は、大学教育をより良くするための支援を組織的に行う部門です。

今年度は、特に「厳格な成績評価」の実施を目指した「成績評価のガイドライン」作成を課題としています。これに関連して、アイアシスタントのシラバスフォーマットを整備し、本格稼働に向けての各種説明会、意見交換会等を実施しています。また、センターが総合化したことを受けて、関係部門と連携し、入学前教育、リメディアル教育、キャリア教育等についての調査、研究も、積極的に推し進めていきたいと考えています。

### 授業アンケートの実施

前・後期の全学共通教育授業科目を対象として、学生による授業アンケートを実施しています。その結果を基に「優秀授業科目」を選出し、表彰を行っています。今年度は、アンケート結果から見えてくる種々の問題(履修人数のばらつきなど)への対応方法を検討したいと考えています。

### FD活動の実施

#### \*FD合宿研修会

年に1回、ワークショップ形式のFD合宿研修会を実施しています。

#### \*IT・FD講習会

教職員のITスキル向上、ITを活用した授業改善を目的に、月に1回の割合で、IT・FD講習会を実施しています。

#### \*FD講演会・研究会

他大学の大学教育支援施設と連携して、講演会や研究会を実施しています。今年度は、「大学教育支援施設等交流会議」を発足させ、東北地区の大学を中心に、他大学との積極的な交流を推し進める予定です。また、学内教員を対象に「中央教育審議会答申勉強会」、「アイアシスタント試行説明会／モニター意見交換会」、「アイアシスタント説明会／講習会」なども

行っています。

#### \*全学共通教育授業公開

前期、後期の授業期間中に「全学共通教育授業公開週間」(前期:5月29日～6月2日・後期:10月23日～10月27日)を設定し、全学共通教育の全授業科目を一般に公開しています。今年から保護者等を対象とした「授業モニター」制度を導入し、学外からの意見をより確実に取り入れられるようにしました。

### 成績評価基準のガイドライン

中期計画・目標等に掲げられている「厳格な成績評価」の実現を目指し、現在、「成績評価基準のガイドライン」作りに取り組んでいます。

### 入学前・リメディアル教育用e-Learning

推薦入試等で入学が決まった高校生、入学したけれども高校までの学習に不足がある学生を対象としたe-Learningシステム及び教材の導入を検討しています。

#### 大学教育支援施設等交流会議の発足

大学教育総合センターでは、他大学の教育支援施設(センター等)関係者と情報交換、意見交換等を行える場を設けることを目的として、「大学教育支援施設等交流会議(仮称)」の立ち上げを呼びかけました。設立準備懇談会が7月14、15日に岩手大学にて行われ、参加各大学より会議の設立について合意が得られました。

#### 平成18年度FD合宿研修会

大学教育総合センターでは、平成18年度FD合宿研修会を8月31日・9月1日に行います。今年度のテーマは「大学教育改善の総合化と組織化」です。1日目は「総合化」、2日目は「組織化」を主テーマにしたワークショップ形式のプログラムを計画しています。

(文責:江本理恵 riemt@iwate-u.ac.jp)

# 専門教育関係連絡調整部門

## 専門教育関係連絡調整部門の概要

この部門は、全学共通教育と専門教育との連絡・調整、学部間の専門教育に関する連絡・調整、教職科目をめぐる連絡調整を主な任務とした部門です。ただし、教職科目については、この7月から教員養成機構が新しく立ち上がったことに伴い、本部門で審議する必要は無くなりました。

昨年度は、会議が定例化できなかつたため、結果的に部門としての検討課題を継続的に審議していくことができませんでした。今年度は、その反省に立って、毎月第2水曜日10時半～12時と会議の定例化を行い、継続的な審議を続けています。

### 「秀」の導入によるきめ細かい評価

この部門でこれまでに議題としたのは、成績評価への「秀」の導入、履修科目登録制限の見直し、教育の個性化、教育力向上のためのアクションプラン、などについてです。この内、「秀」の導入については、5月と6月の2回の会議で審議を行い、その間に学部からも意見を徴集し、部門として導入を了承し、運営委員会に提案しました。提案そのものは、現在の80点～100点を「優」とする評語を、80点～89点までを「優」、90点～100点までを「秀」とするものです。

提案の理由は、いくつかありましたが、審議の結果、「きめ細かい評価を行うため」「学生の学習意欲を喚起するため」の2点となりました。多くの大学で導入が進みつつあるGPA制度については、「秀」の導入とは切り離して、検討を行うこととしました。

### 重複・類似科目の洗い出しと調整

教育の個性化、教育力向上のためのアクションプランを具体化するために、6月と7月の会議で、「重複・類似科目の洗い出しと調整」について検討を行っています。まず、実態把握の問題として、定年教員の後補充ができないなどの理由で、他学部の授業を自学

部の科目に読み替えているような例は、人社、教育の間ではある程度の数になっており、それらは1つの科目が2つの看板を持って授業が行われています。

これらの講義科目を1つに統一することは、課程認定を受けている教職科目の場合に難しく、学務情報システム上も混乱が予想されるので、当面はやむを得ないと考えられます。今後は、工学部、農学部の間で授業名も内容も類似している専門科目を学生数や内容、他の科目との関連を十分に配慮しながら調整し、学部の壁を越えて全学的な観点で教員負担の軽減に結びつけることが課題となります。

さらに、工学部、農学部では、理科の知識・学力が不足している入学者が増えており、かつ、多様化しているため、今後は大学として数学、物理、化学の基礎的教育を充実するために学部を越えた協力体制が必要であることが話し合われています。

来年度へ向け、「学系」や「分科会」の場で、学部単位ではなく、学生の修学履歴や基礎学力に合わせた授業の開講を検討していく必要があります。

### 履修科目の登録制限

22単位上限については、学生からも教員からも緩和を求める声が多数出されていることから、今年度中に検討を行い、来年度から実施できるように一定の措置を決めたいと考えています。

単位制度の趣旨を教員・学生の両方に伝え、授業外学習の充実を図ることが基本ですが、若干の緩和と成績優秀者の範囲の見直しなどを並行して進めたいと考えています。

(文責:玉 真之介 manabi-shien@iwate-u.ac.jp)

# 学生生活支援部門

## 学生生活支援部門の概要

従来の全学学生委員会が廃止され、4月1日から大学教育総合センターが発足し、その一部門として学生生活支援部門が設置された。審議事項は、全学学生委員会の事項を継承しているが、必要に応じて大学教育総合センター運営委員会への提言を行うこととしている。その主たる事項は、次のとおりである。

### ①学生の団体又は学生の課外活動及びその施設

\* Let'sびぎんプロジェクト、学生議会(学友会、新入生歓迎実行委員会、不来方祭実行委員会)



\* SCS (スチューデント・キャンパス・サポーターズ)・・・ピアサポーター、図書館サポーターズ



\* 課外活動サークルリーダーシップセミナーの開催、不来方祭、課外活動供用施設の管理運営

### ②学生に対する広報活動

広報誌「Hiこちら岩手大学」への編集協力

### ③入学料及び授業料等の免除並びに徴収猶予

### ④日本学生支援機構奨学生の選考及び推薦

### ⑤学寮及び国際学生宿舎

### ⑥福利厚生施設の運営及び厚生事業

大学会館の管理運営、各種食堂等の管理等

### ⑦体育施設の管理運営

### ⑧学生の表彰及び指導

\* 学生表彰被表彰候補者の推薦

### ⑨その他学生の修学支援及び課外活動

\* 各種委員会等への委員の選出

\* 学長と学生との懇談会開催

\* ガンチョンタイムの開催・・・学務担当理事と学生との月1回のランチタイム



\* ロードレース大会の開催・・・来年度は50回記念大会のためビッグイベントを企画中



\* がんちゃん奨学資金の貸与

\* 担任教員と保健管理センター教員との連絡会議の開催

\* 学生に対する駐輪指導

\* 学生生活の手引き・クラス担任教員による学生指導のためのガイドラインの作成

(文責: 菊地 壮 kikuchik@iwate-u.ac.jp)

# 就職支援部門

## 就職支援部門の概要

～キャリア教育の推進～

この部門の重要な任務は、従来の就職支援業務の充実を図るための審議はもとより、新設の「大学教育総合センター」に関連する組織の連携協力の下で、入学生一人ひとりを4年間の大学生活の中で魅力ある人材に育て、社会人として大学から巣立っていけるような出口部分を主とした環境作りと言える。従来の大学教育センターは教育内容の改善に特化していたが、総合センターは入学から卒業まで「丸ごと面倒を見る組織」で、卒業後の進路に向けた学生の職業意識の醸成など低学年からの「キャリア教育」の推進も視野に入れている。今年度前期に「ジョブカフェいわて」と連携し、職業意識を涵養しキャリアビジョンを描ける学生を育てることを目的に、2、3年次学生を対象とする「キャリアを考える」と題した講座を授業形式で14回開催。この中に各界で活躍する本学OB・OGを講師とした講座も開催する。「キャリア」を単なる職業ではなく「生き方」として捉え、自らの人生について考え、就職への準備とすることが狙いである。また、後期にも別の「キャリア教育」講座を授業形式で15回実施する計画を進めている。次年度は、単位化された正式な授業としての「キャリア教育」の開講を目指している。

## 「ジョブカフェ岩手大学スポット」の開設

～就職相談事業の充実～

学生の円滑な就職活動を支援することを目的とし「ジョブカフェ岩大スポット」を「就職支援課」隣室に開設し、定期的に(毎週火・木、12時～15時)就職相談を行っている。

## 学内合同企業セミナーの充実

～就職活動の実践～

就職率向上に貢献している事業の1つで毎年3月上旬に学内でブース形式により開催。採用担当者と直接面談し企業・業界研究として体験する貴重な就職活動である。

## 企業訪問(開拓)の実施

～東北6県の企業を訪問～

本学のPRを行うと共に求める人材像など訪問先企業の理解を深め、企業側と相互協力関係を築き就職先確保等に資する。

## 「求人情報」公開システムの活用

地域、業種別等の条件設定により求人票を効率的に検索するシステム。学生に好評で就職率向上に大きく貢献。企業訪問先の選定や「学内合同企業セミナー」の冊子作成などにも活用している。

## 「岩手大学就職応援ブック」の発行、配布

～就職活動の基本を学ぶ～

毎年「学部3年次、大学院1年次」学生に「就職応援ブック」を配布。マナー、身だしなみ、企業へのアプローチ法、試験に臨む心構えなど就職活動をする上での必要事項が網羅され、学生には強い味方となっている。

## ○就職支援状況の推移

(学内合同企業セミナー、企業訪問、システム登録企業件数)

年度	職員数	学内合同企業セミナー	企業訪問	システム登録企業件数	備考
14	3(1)	56	55	1500	「就職情報管理システム」導入
15	4(1)	108	77	2000	「求人情報」公開システム運用開始
16	5(1)	216	129	2700	「就職支援室」(課から独立)設置
17	5(1)	324	149	4400	「就職支援課」設置 「就職応援ブック」発行開始 「ジョブカフェ岩大スポット」開設

( )はパート職員で内数

\*13年度に「学生課就職情報室(職員2名)」発足

(文責:後藤周悦 goto@iwate-u.ac.jp)

# プロジェクト(現代GP)

## 各学部の特徴を生かした全学的知的財産教育

### 現代的教育ニーズ取組支援プログラム: 現代GP(平成17年度～平成20年度)

#### 取組の概要

この取組みは、以下のような構成で進んでいます。

- (1) 知財関連科目が増えつつある中で、全学的な知財教育に取り組むにあたり、環境問題に役立つ知的財産という観点からこれらを体系付け、地域連携推進センターが行っている知的財産本部整備事業のバックアップの下で、実学的な知財教育を全学的に行っています。
- (2) 自発的共同学習を通じて、知財に関する多様なかわりの理解、自ら創造し学び取っていく力を高めるためのワークショップを設けています。
- (3) 3段階構成の教育システムを構築します。つまり、第一段階として、特許庁や企業等の現場への見学を含めた知的財産制度の入門講座を行い、第二段階として、異なる学部の学生が混成で、自発的協同学習を通じて知財に関する多様なかわりの理解を高めるためのワークショップを取り入れます。最後に、各学部特化の専門講座を開設します。人文社会科学部においては、法制度の実務的・法的理解を深め、弁理士へのチャレンジを可能にする内容の講座を、教育学部においては、教育実習を通じて子供に知的教育する方法の開発する講座を、工・農学部においては、自らの研究成果を知財として活用する実務的能力の涵養を目的とする講座を設けています。

#### 平成18年度取組状況

本年度は、昨年度の調査や準備検討会をふまえて「知的財産入門」、「知財ワークショップ」、「特許法特講」等の新設科目を開講しました。ひき続き環境問題と知財教育との連関について、調査・検討を行っています。また、「知的財産教育論」の平成19年度開講に向けて準備を進めています。

#### 知財ワークショップ

現代GPに関わる共通科目に「知財ワークショップ」

(集中講義)があります。「知財と環境保全は両立しうるのか」を課題に、現地に学び、ワークショップ方式で内容を深める科目です。

遠野、葛巻、松尾いずれかを訪れ(第1日)、それぞれのグループごとに、現地の具体的課題を発見したり、地域のリーダーからレクチャーを受けます。遠野では、民話に関連させた商品開発は生まれているか、知財が地域の活性化に結びついているかを知ります。ここから「民話は地財か」を考える契機を導き出そうとしています。松尾では処理技術の確立過程にどのような歴史と課題があるかを考えます。地域と鉱山開発、開発後の課題を迫ります。八幡平の開発に関わり、道路とスキー場、自然の保全はいかに実現しうるかも考察の対象にします。葛巻では商品開発や環境保全型開発の実際を見て、農山村の開発のあり方を問います。2日目は、講師による知財に関する講義とワークショップがおこなわれます。第3日は各グループでの中間発表、全体会のワークショップでおこなわれます。テーマの絞込みをすすめ、午後には各グループごとに、プレゼンテーションを実施します。発表をもとに各グループで報告書原稿を作成します。リーダーがあつまり、報告書を完成させる内容をもつ科目です。

- ・「知的財産入門」(新設科目)の開講(4月～8月)
- ・「特許法特講」開講に向けて講師を招いての準備検討会の開催(5月)
- ・「知財ワークショップ」開講に向けたプレワークショップと準備検討会の開催(6月)
- ・水資源・環境学会と地域連携推進センター共催の研究大会後援(6月)
- ・環境と知財研修会「環境・伝統・知財との接点を求めて」開催(6月)
- ・「知財ワークショップ」(新設科目)の開講
- ・米国における知財教育についての事情調査(8月下旬)
- ・「特許法特講」(新設科目・集中講義)の開講(9月上旬)
- ・特許情報の活用に関するセミナーの開催(9月上旬)
- ・特許庁や民間企業知財部などの現場研修のシミュレーションの実施(9月下旬)
- ・「知的財産教育論」開講に向けて講師を招いての準備検討会開催(10月)
- ・「造形特別演習(デザイン)」で非常勤講師による知的財産に関する一部講義の実施およびこの分野の研修会の開催(10月)
- ・講師を招いての環境教育に関する研修会開催(11月)
- ・「知的財産教育論」開講に向けての事例研修・調査(12月)

(文責:山崎憲治 yamaken@iwate-u.ac.jp)

# プロジェクト(放送大学)

## 岩手大学と放送大学との間における 単位互換モデル構築に向けた研究 プロジェクト(平成17年度～)

岩手大学と放送大学は、平成17年度より、以下の目的と研究課題をメインテーマとした「単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト」(放送大学活用研究プロジェクト)に取り組んでいます。

### (目的)

岩手大学において放送大学が開設する特定の授業科目を教育課程に取り入れ、その教育効果等を検証することにより、放送大学をより有効に活用するための在り方や改善点等を明らかにし、放送大学と岩手大学との間の有効な単位互換モデルを構築する。

### (研究課題)

- (1) 放送大学のどのような科目を利用することが有効か。
- ・語学科目、教養的科目、専門科目等の別での検証
  - ・学問分野別の検証
  - ・放送授業の場合の教育効果の検証
  - ・受講者規模、非常勤講師の採用との関係を踏まえた効率性の検証
- (2) より教育効果の高い利用法はどのようなものか。
- ・学生個人で視聴するのではなく、集団で視聴する方法の効果
  - ・放送の一方通行性を補う教育サポートの在り方
  - ・生涯学習の観点から自律型学習を導入する意義

(3) より利用しやすい教育システムとするため、どのような改善が必要か。

- ・両大学の教務スケジュールの調整
- ・岩手大学のニーズに応じた放送大学からのサービスの提供

### (実施科目)

**平成17年度**：以下の7科目(表記は「岩手大学科目名 / 放送大学科目名」)をプロジェクト科目として開講しました。

- \*「初級韓国語(入門) / 韓国語I ('02) & 韓国語II ('02)」
- \*「心の科学 / 心理学初歩('02)」
- \*「現代社会と著作権 / 現代社会と著作権('02)」
- \*「分子生物学 / 分子生物学('05)」
- \*「生活空間論、建築文化論 / 住計画論('02)」
- \*「細胞生物学 / 細胞生物学('03)」
- \*「アグリビジネス論 / アグリビジネス('02)」

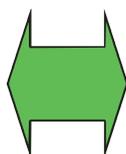
**平成18年度**：以下の6科目についてプロジェクトを実施しています。

- \*「初級韓国語(入門) / 韓国語入門 I ('06)」
- \*「文化論特講 I / 芸術・文化・社会('06)」
- \*「初級韓国語(発展) / 韓国語入門 II ('06)」
- \*「著作権法概論 / 著作権法概論('06)」
- \*「文化論特講 II / マスメディア論('06)」
- \*「建築文化論 / 建築意匠論('04)」

**平成19年度以降**：未定



岩手大学  
Iwate University



放送大学  
THE UNIVERSITY OF THE AIR

(文責: 後藤尚人 ngtogo@iwate-u.ac.jp)

# プロジェクト(アイアシスタント)

## 大学教育センターにおける組織的授業改善と教室外学習支援システムの構築 (平成17年度～平成19年度)

### 概要

平成17年度より「大学教育センターにおける組織的授業改善と教室外学習支援システムの構築」プロジェクトを実施しております。「教室外の学習も重視した学習指導」、「授業の進行に応じた学習到達度を把握できるシステム」の実現を目的に、学生の自主的な学習支援を可能にするシステムです。

### アイアシスタントの機能

アイアシスタント(全学統一拡張Webシラバス)は、シラバスのみならず、授業記録や講義資料(電子ファイル)の受け渡し、受講生とのコミュニケーション機能(BBS)、課題やドリルなどを備え、個人専用のポータルページから授業期間中もフルにお使い頂ける授業支援システムです。



- \* 岩手大学の全授業科目について、学生に対する到達目標や成績評価の方法・基準などが明記できる詳しい「シラバス」
- \* 授業期間を通してそのつど更新が可能で、各回の授業内容に加えて授業で使った資料なども同時に登録できる「授業記録」
- \* 教員と学生との相互コミュニケーションを促す電子掲示板(BBS)としての「お喜楽版」や「テーマ版」
- \* 授業支援機能としての「iカード(レスポンスカードのWeb版)」、「課題(レポート)」、「ドリル」

### 試行運用説明会の実施

アイアシスタントが第1次リリースを迎え、今年度の4月より試験運用(試行)を開始しています。また、試行に伴い説明会を3月と5月に2回行い、モニターになって頂きました教員も現在36名となっております。モニター教員からのご意見や要望を第2次リリース(10月)に向けて反映できるようにシステムの修正や充実を行っております。



### 今後の予定

本年度の10月より全教員による試行がスタートします。来年度が正式に本格運用であることから、教職員への利用方法の説明会の開催を7月より行っております。

また、アイアシスタントを利用することにより、現在求められている組織的授業改善と教室外学習の支援が期待されます。ご協力よろしくお願いたします。

(文責: 福永良浩 fukunaga@iwate-u.ac.jp)

# 岩手大学全学共通教育の概要

## 1. 大学教育の基本

大学教育は、「4(6)年一貫教育」という観点から、教養教育と専門教育との相互連携によって営まれることになっています。

本学のカリキュラムも、「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」と規定されている大学設置基準第19条第2項にもとづいて編成されています。

## 2. 全学共通教育として実施される本学の教養教育

本学の教養教育は、全学共通の関心・責任・協力のもとに、全学部の教員による全学担当体制を組織して、「全学共通教育」として実施されています。

## 3. 本学の教養教育の理念

本学の教養教育は、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことを理念として実施されています。

## 4. 全学共通教育科目の二元的な構成とそれぞれの共通目標

本学の全学共通教育科目は、「教養科目」と「共通基礎科目」によって二元的に構成されています。

### (1) 教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」という教養教育の理念にもとづき、特に「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という、3項目に則して設定されています。

- ① 学生がさまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を広く生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援
- ② 学生があらゆる分野の日常生活の営みの基礎になっている各種の常識・通念を掘り下げて問い直すことができるほどのという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援
- ③ 学生が多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援

### (2) 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目の教育目標は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の社会生活を進めるうえで、共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を習得させること、として設定されています。

## 5. 教養科目および共通基礎科目の内部区分

### (1) 教養科目の区分

教養科目は、主題別に「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、「総合科目」及び「環境教育科目」の5つに区分されています。教養科目として学ぶ授業科目は、これらの区分に沿って選択することになります。

### (2) 共通基礎科目の区分

共通基礎科目は、「外国語科目」、「健康・スポーツ科目」および「情報科目」に区分されています。

## 編集後記

☆われわれも環境を意識し、風力発電の如く(挿絵:表紙)、その大地のエネルギーをより良いエネルギーに変換し、岩手大学の風車でありたい。

福永@あるある探検隊

### *erudio 5*

2006年8月21日発行



国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター  
*Iwate University : University Education Center*  
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

入試部門

Tel : 019-621-6926

専門教育関係連絡調整部門

Tel : 019-621-6925

全学共通教育企画・実施部門

Tel : 019-621-6925

学生生活支援部門 (学生支援課)

Tel : 019-621-6058

教育評価・改善部門

Tel : 019-621-6924

就職支援部門 (就職支援課)

Tel : 019-621-6059

(部門共通)

FAX 019-621-6928

電子メール [uec@iwate-u.ac.jp](mailto:uec@iwate-u.ac.jp)

Webサイト <http://uec.iwate-u.ac.jp/>

